

書 評

Tze-lan D. Sang.

The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China.

濱 田 麻 矢

神戸大学

とは違ふどのような愛情、どのような葛藤が描かれたのか。本書は今まで殆ど手をつけられていなかった「女性間の絆」をテーマにした意欲的な論考である。著者の桑梓蘭氏（Tze-lan D. Sang）は現在オレゴン大学で教鞭をとる研究者で、本書は彼女の博士号取得論文に基づいて書き起こされたものという。十七世紀から同時代に至るまで、轉換期と思われる時期の中から選ばれた特徴的なテキストを精讀し、女性同士の絆がどのように表現され、讀まれてゆくのかを丹念に追われている。

まず構成について紹介しておこう。時代順に四部構成となっており、第一部「前近代中國」では十七世紀末から十八世紀初頭がえらばれている。第一章「前近代中國における女性同士の絆」では前近代の中國における女性間の關係を振り返り、第二章「蒲松齡『聊齋志異』における風變わりな娘たち」では女性間の戀愛を描いたフィクションの稀な例として『聊齋志異』の「封三娘」がとりあげられている（「封三娘」については巻末に著者による英譯が付されている）。第二部「民國期の中國」では、特に五四時期（一九一〇年

代の中頃から二〇年代の中頃まで)に焦點があてられる。第三章「ホモセクシュアリティを翻譯する——民國期中國における同性愛議論——」では歐米からの影響を受けて性科學という新しい概念が導入された過程についての紹介があり、第四章「五四小説における女性同性愛」ではフィクションの中でとりあげられた女性同性愛について、盧隱の作品を中心に詳述する。第三部「毛澤東以後の中國」は、中國大陸におけるここ二十年ほどの動向を追うものだ。第五章「すばらしき新世界——ポスト毛澤東時代の中國」で當代中國の性意識に關する簡単な見取り圖が提示された後、第六章「林白による女性同性愛の敘述」では同時代作家の林白が、第七章「性別を超える意識と『私人生活』」では同じく陳染が具體的に分析される。第四部「戒嚴令以後の臺灣」は、戒嚴令が解かれた一九八七年以降の臺灣に當てられている。第八章「公共空間におけるレズビアン行動主義」でまず臺灣の同性愛者による實際の活動を論じたのち、第九章「自傳を著すレズビアン」では自分を語るレズビアン、特に邱妙津についての論が展開される。

中國文學についても、今まで男性のホモソーシヤリティ及びホモセクシュアリティについては多くの論考がなされてきたが、女性間の絆は未踏の領域であったと言っているだろう。著者は、序章において中國におけるレズビアンの振興を、女性(特に少女)同士の親密な連帯が、「姉妹としての愛情(情)」から「性的な欲望(色)」に變化してゆく過程としてとらえている(五頁)。こうした「女の絆」を追うために、『聊齋志異』や盧隱の小説のような「經典文學(カノン)」以外に大量の通俗小説や雑誌から資料が涉獵されている。例えば同じく序章で紹介されている寄り添う少女達の寫眞は、民國期の雑誌『眉語』及び臺灣の同志(同性愛者)雑誌『G & L 熱愛雜誌』、『土狗 (dogeater) 雜誌』からとられたものだ。『眉語』は「雅人韻士、花前月下之良伴」(一九一四年十月、第一卷第一號の「宣言」となることを企圖して出版された典型的な鴛鴦蝴蝶派の雑誌であり、五四以降の文學を語る際にはつねに商業主義の消閑文學というラベルとともに語られてきた。後者のうち『G & L 熱愛雜誌』は一九九七年に創刊された世界初の中國語

「同志」雑誌だったが、二〇〇〇年末には『熱愛雑誌』と名前を變え、男性同性愛者のみに讀者の對象を絞るようになってしまった。また男性中心主義には偏向しないと宣言した一九九八年創刊の『土狗』はすでに廢刊となっている。このように、出版された資料から少女間の絆を拾い上げようという試みは、次々に現れては消える泡沫をつなぎとめようとする作業ともいえるかもしれない。文化の「主流」からみれば、こうした少女寫眞は泡沫雑誌に載せられたいかがわしいもの、ということになるだろう。著者はそこで、ではなぜ「女性の」同性愛にはよりいかがわしく・惡趣味なもの、という色合いが強調されるのか問いかける。なぜ少女が見つめ合い、手をつなぐ寫眞は男女間のそれより、あるいは男性間のそれより安っぽいもの・とるにたりないものとして受け止められているのか。

著者は、前近代から現在に至るまで、中國における性愛經驗を論じるためには、女性間の絆は不可缺少要素をなしていたはずだという。にもかかわらず、前近代のテキストにおいて、正面きつてその絆が統制されることも議論され

ることなかった。「書き手」家父長制内を支える男性にとつて、女同士の親密な關係は俗な話柄となることがあつても、所詮はまじめにとりあげるべき脅威とはなりえなかつたからである。古代中國における女性同性愛は、西洋世界のように邪惡で罪深いものではなかつた。一夫多妻に基づく中國前近代の家父長制度において、何よりも大切だったのは男系の存續であり、女性の義務は（男性と）結婚し、夫に性的に従い、子供を産み、貞節を守ること以外にはなかつたのである。男女はその生活範圍を峻別されていたが、女たちの間にどのような關係が生じようとも、それはせいぜい嘲笑と好奇の對象となるに過ぎなかつた。禁忌となるのは同性愛ではなく結婚への反逆であつた。容赦ない非難と抑壓が浴びせられたのは「女を愛する女」ではなく「結婚しようとしないう女」であつたことに桑氏は注目している。そこで「封三娘」でヒロインが處罰を受けるのも、女同士が戀愛をしたためではなく、結婚制度に従つて子供を産む、という義務を拒否したためによるのだという讀みが提示される。

こうした状況に變化が起つたのが第二部の舞臺となる二〇世紀初頭である。ヨーロッパで確立したセクソロジーによつて中國にセクシュアリティの概念がもちこまれたのだが、それは單なる西洋思想のグローバリゼーションとしては片付けられない側面を持っていた。一九一〇年代の初頭から、中國の進歩派知識人たちは、自分たちの社會的實踐のために、意識的に歐米の性科學者の理論を利用していたのである。一九二〇年代には女性同性愛の衝擊を低く見積もるべくエドワード・カーペンターの比較的穩當な同性愛理論が援用された一方、その後にはハヴロツク・エリスの理論がもてはやされて、同性愛がいかに「正常」な性から逸脱した惡魔的なものであるかが喧傳された。このように、二〇世紀前半には、ヨーロッパ發の規範的な理論が女性同性愛への嫌惡と不安を中國に増殖させることになる。著者が周到に檢證しているように、「同性愛」という概念そのものが、五四のうねりとともにもたらされた產物であることは、日本語經由を含むさまざまな譯語が作られたことからわかる。呼稱が生まれた段階で、女性同性愛も

從來の名前のない邊土から非難すべき性的逸脱へと「昇格」し、知識人によつて正式に斷罪されるようになった。「民主と科學」がもてはやされた時代にはフィクションの枠組みにも醫學・衛生學由來の價值觀が反映されることとなり、リヒャルト・フォン・クラフト＝エビングやハヴロツク・エリスなど、ヨーロッパにおける精神醫學が女性のセクシュアリティを規制する新たな規範の導入のために援用されることとなった。こうして「科學的知識」を背景にしながら、ヨーロッパの敘事學に影響を受けた新しい小説が生み出されてゆく過程で、同性愛（特に女性の同性愛）は「近代科學」という錦の御旗によつて、心理的もしくは性的な「變態」であると位置づけられてゆく。周作人が、一方でサッフォの詩を崇拜しながら一方では女性同性愛を非難していた、という指摘（二二八頁）は、五四期の男性知識人に共通する二面性だったと言えるだろう。舊式の結婚（特に一夫多妻制）が諸惡の根源として攻撃された一方で、異性間の自由戀愛こそが新たな従うべき規範となり、異性に背を向ける女性は病的である、とされてしまったので

ある。しかし新式の教育を受け、職業を持つことができるようになってからは、経済的・精神的に自立し、男性との結婚を理想と考えなくなる女性が出現するのは當然の流れであつた。

民國期の小説家中、本書が焦點をあてているのは盧隱であり、彼女の代表作とされる小説二編『海邊の友人（海濱故人）』、『麗石の日記（麗石的日記）』の他に隨筆『東京小品』が精讀されている。盧隱の小説が、異性愛への忌避と嫌惡、同性の友人との親和感をうたいあげていることについてはリディア・リウ氏やウエンディ・ローソン氏の研究でも指摘されている通りである。『麗石の日記』は故人の手記という形をもって女性同士の共同生活への夢とその破綻とを描く。桑氏が主人公の夢をフロイドイズムの發現だとする著者の解釋にはやや強引な印象を受けたものの、同時期の他作品に比べて、盧隱が女性の精神的な結びつきから飛び出し、肉體的な欲望まで意識して描いているということは確かであろう。その筆者の推測は、今まであまり注目されてこなかった『東京小品』に裏付けを得ている。夫

について東京に渡つた盧隱が錢湯での見聞や賣春宿での小冒險などを經て、肉體を公衆の前に曝すことを忌避しない日本人女性の肉體に贊美を寄せるようになっていく過程を、筆者は丁寧にとどめてゆく。中でも、渡日時には日本への嫌惡を隱そうとしなかつた盧隱のナシヨナリズムが、東京で下層階級の日本女性と交流を経たのちに、女性同士の緩やかな連帶のもとに軟化してゆく過程は興味深い。ジェンダーとナシヨナリズムは、互いに絡まり合いながらかわるがわる重みを主張して盧隱の意識にあらわれるかのようだ。おずおずと自分の求めるものを表現しつつ、その夢に一貫して悲觀的な態度をとつていた盧隱の作風は、同じく日本女性の性的なおおらかさに目を奪われた主人公を描く郁達夫と好對照をなしている。郁達夫は初期作品『沈淪』において、留學先の日本で性的に煩悶するインテリ男性を描いて文壇からの注目を浴びた。日本人女性によって引き起こされた性的煩悶は、最終的に主人公の強烈なナシヨナリズムに回收され、彼は祖國が強大になることを願ひながら自死する。祖國の將來を憂える視線は同じながら、『沈

『淪』は『東京小品』に描かれるような戸惑いや搖れとは無縁である。盧隱は異國の同性にほのかな共感と連帶感を寄せるが、郁達夫の主人公が日本人男性に連帶を感じることはありえない。また、同じく郁達夫が女性同性愛を扱った短編『彼女は弱い女性（她是一個弱女子）』では、天使のよ

うに愛らしい女性が怪物のような（もはや女とはいえないような）第三の性をもつ女によって誘惑され、墮落させられるというステレオタイプが描かれている。この小説では、女性同性愛とは正常からの逸脱であり治すべき病であるという視點がはっきりしており、「正常な」女性を誘惑する女性とは男性の愛を求めるすべのない醜い女であると割り切られている。桑氏の言うように、こうしたわかりやすい性的變態は、中國の社會的混沌と弱體を描くための工具ではない。盧隱が個人の問題、ジェンダーの問題として女性の絆を描いているのに對して、郁達夫は社會の問題、國家の問題を描くための方法として性を描いた。民國期前半の新小説はしばしば救國を第一の主題とし、個人の解放というもう一つの主題はその後に隠されて評價も後れがち

であつた。近代に入つて初めて概念化された女性同性愛もまた、「變態」「逸脱」のレッテルを貼られて、男性作家によつてステレオタイプに物語化されたため、なかなか「歴史の地表に浮かび出る（孟悦、戴錦華）」ことができなかったのである。

第三部では文革以降の新時代を迎えた中國大陸の狀況が論じられる。人民共和國成立後、八十年代後半に至るまで、同性愛という言葉自體がタブーとされ、また同性愛者とは解放後の中國からは驅逐されたはずの「變態」であるとされてきた。著者によれば、一九九八年に北京で初めてレズビアンによる集會が行われ、翌年にはニューズレターも發刊されたという。

文學創作については、文革後には張潔、劉索拉、王安憶といった作家たちが女性間の絆について佳作を發表しているが、著者が注目するのは同性愛そのものを題材の一つとした林白と陳染である。林白の『ひとりきりの戦争（一個人的戦争）』は一人の少女の性的遍歴と破滅を描いて發表と同時に賛否兩論を巻き起こした長編であるが、桑氏はこの

作品及び作家林白を論じるときに中國國內でしばしば使われる「女性意識」あるいは「女性創作（女性寫作）」という言葉に好奇心をそえられるとともに違和感を覚えるという。「女性」という言葉を冠することによって、林白の描く同性への欲望（ホモエロティズム）が本質主義的に「女性性」と関連づけられてしまう恐れがあるというのがその内容である。確かに、林白の代表作『ひとりきりの戦争』は「女性創作に特徴的な審美性を持ち」（陳思和）、「女性意識の最も深いところに直接入り込んでいる」（陳曉明）と評されてきた。著者がこうした讃辭に不満を覚えるのは、「女性意識」と名付けて蓋をしようことによって、このテキストに描かれた中國における同性愛嫌惡（ホモフォビア）への複雑な視點が見落とされ、無害なものにされてしまうからだろう。主人公が自らの欲望を抑壓し、ホモフォビアに屈服するというプロットそのものが、現在の人民共和國で同性愛（しかも女性の）を生かすことの難しさを語っているとも言える。

一九六二年生まれの陳染は、一九五八年生まれの林白と

同世代で、この二人は女性の内面を掘り下げて描寫する作風が似ていることもあり、よく比較對照される。陳染の『個人的な生活（私人生活）』もまた、一人の少女の半生が語られるという形式をとる。作者自身を思わせる主人公の、非常に個人的でデリケートなエピソードを重ねてつづった小説を通して、陳染は毛澤東後の中國において、性はすでに解放されたという假說に挑戦している。林白の敘事が單純な「女性性」に歸結されるのを拒むのと同様に、陳染の作品も「女性性」「個人性」のみに還元できるものではない。「個」の輕みに焦點をあてている七十年代生まれの「晩生代作家」（衛慧や棉棉など、「美女作家」とも呼ばれる作家たち）とは決定的に異なり、陳染は「私人生活」をテーマの中心にしつつも、決して「公的社會」に背を向けていくわけではないからである。むしろ彼女は「私」に絶えず侵入してくる、「公」的權力に多大な關心を拂っているという意味で、傳統的な中國知識人のスタンスを持った作家であるとすら言える。

第四部では戒嚴令が解除されたのちの臺灣について報告

がなされる。人民共和國の小説には同性への欲望をメインテーマとした長編はいまだに生まれていないが、臺灣では一九七六年に發表された玄小佛『圓の外側（圓之外）』を初め、朱天心『擊壤歌』（一九七七）、郭良蕙『二種以外（兩種以外）』（一九七八）など、七十年代中頃から女性間の絆や欲望をテーマにした長編小説が書かれてきた。特に九十年代中頃からは、アメリカを経由したクイア理論が盛んに受け入れられるようになり、「同志文學」の隆盛ぶりは中國大陸はもちろん、香港など他の中國語圏を遙かに上回るという。

最終章で扱われる邱妙津は一九九五年にバリで自殺したが、遺作である彼女の『モンマルトルの遺書（蒙馬特遺書）』以上に、死の前年に發表された長編『鰐の日記（鰐魚手記）』は大きな反響を呼んでおり、桑氏の分析もこの『鰐の日記』を中心としている。

女子大學生を主人公とする『鰐の日記』では両性への欲望とさまざまな人間模様以外に、「人間の皮をかぶった鰐」という同性愛者の形象が描かれる。社會が「鰐」に對して

抱く不信と潜在的な嫌惡、統制についての描寫が、この小説を臺灣におけるレズビアン文學の經典としたのはもちろん、消費社會へ懷疑的なまなざしを向ける文明論としても讀まれるべきベストセラーとした。

人民共和國と臺灣とでは、作家をとりまく政治制度や文化狀況、讀者層が異なっているのは自明のことだ。しかし資本主義國家であろうと社會主義國家であろうと、同性とのつながりを描こうとする作家の前に傳統的な家父長制、強制異性愛社會が立ちはだかっていることは變わりないのである。

以上に紹介したとおり、本書は晩清から二〇世紀末まで、ほぼ三百年という長い時間をカバーし、（女性）同性愛についての社會史的背景をふまえつつ、注目すべき作家及び文學作品について丁寧な分析を施した好著である。フェミニズム（女性主義）による文學解釋は中國國內でも海外でも盛んに行われているが、同性（女性）同士の絆が文學作品中にどのように描かれてきたか、というテーマに取り組

んだのは本書が最初の一冊であり、今後近現代の中國・臺灣文學における女性文學を學ぶうえで、参照すべき觀點を少なからず提供してくれるだろう。

ただ、「レズビアン」という表題及び「同性への欲望」という副題から喚起される印象と、本書で論じられている社會現象及び個々の作品との間には、揺れがあるのも確かである。本書の參考文獻にも挙げられているイヴ・セジウィックは、男性のホモソーシャル（擬似同性愛的）な社會にはホモフォビア（同性愛嫌惡）とミソジニー（女性蔑視）がセットになっていることを明らかにした。男性が女性を交換することによって社會が成立しているとき、交換の主體である男性はその行爲に與しない同性愛者を嫌惡し、交換の對象である女性を輕蔑することによって同性間の結束を高める、という理論だ。この理論を借りるならば、社會の主體たりえない女性の場合には、「同性に親密な友情を感じる」ホモソーシャルが「同性に性的な欲望を感じる」ホモセクシユアル（同性愛）を嫌惡する理由はない。事實、女性の場合には、セジウィックが男性について明確に線引

きしたように「親密な友情」と「性的な欲望」をわけるところは困難なことでもあり、また不要な作業でもあるように思われる。レズビアンのライター・掛札悠子は、「多數派の形にもとづいて異性愛はこういうものと思われているように、多數派の形にもとづいてレズビアンとはこういうものという思いこみがレズビアンの中でも作られている。だから、ある女性と親密になりたいという思いを初めて抱いたとき、女性はそれまで自分がいた「異性愛」（を正常とする社會）の圓の中から「レズビアン」の圓の中心へと一足飛びに變わることを要求されてしまう。自分の心のなかで起きていくわずかずつの變化を自覺し、それに従って親密さを作り上げていくということなしに」という（「レズビアン」である、ということ）。「同性愛」、「レズビアン」という過激なレッテルが先行するあまり、我々は掛札のいう「わずかずつの變化」を見逃してしまいがちではないだろうか。本書でとりあげられた作品において、作者は廬隱『海邊の友人』は「親密な友情」を、『麗石の日記』は「（潜在的な）性的欲望」を描いたものだと考えている。廬

隱の作品がこうした「わずかずつの變化」の兆しを描いたものとするならば、本書第三部、四部の同時代作品は『レスビアン』の圓の中心へ「一足飛びに變わ」ってしまつた最先端作家によるものといえる。では二〇年代の廬隱から、八〇年代後半の林白、陳染に行き着くまで、あるいは九〇年代の邱妙津に到達するまでの女性文學は自分たちの絆をどう描いていたのだろう。左翼運動に向かうまでの丁玲については辛うじて言及があるが、例えば四〇年代の張愛玲や蕭紅、建國以降の革命文學（楊沫など）についても、廬隱から林、陳をつなぐ女性敘事の系譜についてぜひ知りたいと思う。

また、第二部中に「スクールロマンス」という節が設けられているように（二七頁）、女性同士の絆に對して女學校が果たした役割は甚大なものがあつたはずだ。新しいスタイルの女學校が清朝によつて設立されたのは一九〇七年のことである。それがこの時代の女性にとっての知識、權力、セクシュアリティといった概念に大きな變化を與えたであろうことは想像に難くないが、本書は女學校の成立に

ついては正面からとりあつかわれていない。また、二〇世紀初頭の偶像ともいえる秋瑾が表明した「姉妹」へのアジテーションは、女性が女性の連帶を公によびかけた最初期のものであるが、彼女についての言及がなかったことも惜しまれる。

以上、本書を読んで受けた啓發が大きかつただけに、更に知りたいと思つた點について簡単に述べてみた。エピソードによると、今後作者は晩清の女性創作について検討を深めていくという。前近代から近代にまたがつて築き上げられた女性の絆について、更に分析がすすめられてゆくことを期待したい。

(Chicago and London: University of

Chicago Press, 2003, 392 pp.)